



大阪ブランド戦略

博覧会都市・大阪に輝く 珠玉のアート遺産

～アマチュアリズムが貫く大阪の芸術文化～

大阪ブランドコミッティ
アートパネル

目次

はじめに	1
第1章 大阪における現代アートの特徴	2
1 アマチュアリズムが貫く大阪の芸術文化	2
2 近代洋画と日本画の教育と発展	2
3 写真クラブの誕生	3
4 博覧会都市・大阪に現存する遺産	3
第2章 大阪に育まれた現代アート	4
1 吉原治良と具体美術協会	4
2 もうひとつの前衛伝説	4
3 関西ニューウェーブ 森村泰昌の出現	5
4 大阪を拠点に活動する現代音楽の巨匠小杉武政とサウンドアートの藤本由紀夫	5
5 現代彫刻の旗手たち ～持続するころざし～	5
6 商業美術をリード ～グラフィック・デザインの隆盛～	6
第3章 現代アートの実験地・発信地としての大阪	8
1 日本初の現代美術館「国立国際美術館」	8
2 作品としての建築	8
3 道頓堀界隈の文化	9
4 地域社会に密着し、根づくアート系 NPO の活動	10
5 美術教育と研究機関	10
第4章 サブカルチャーとしての大阪発信アート	11
1 マンガ	11
2 造形集団「海洋堂」	11
3 空間デザイン集団 graf(デコラティブモードナンバーズリー)	11
4 劇団「維新派」	12
第5章 ブランド資源のアピール戦略	13
アートパネル構成メンバー	14
【参考】 大阪ブランド戦略について	15

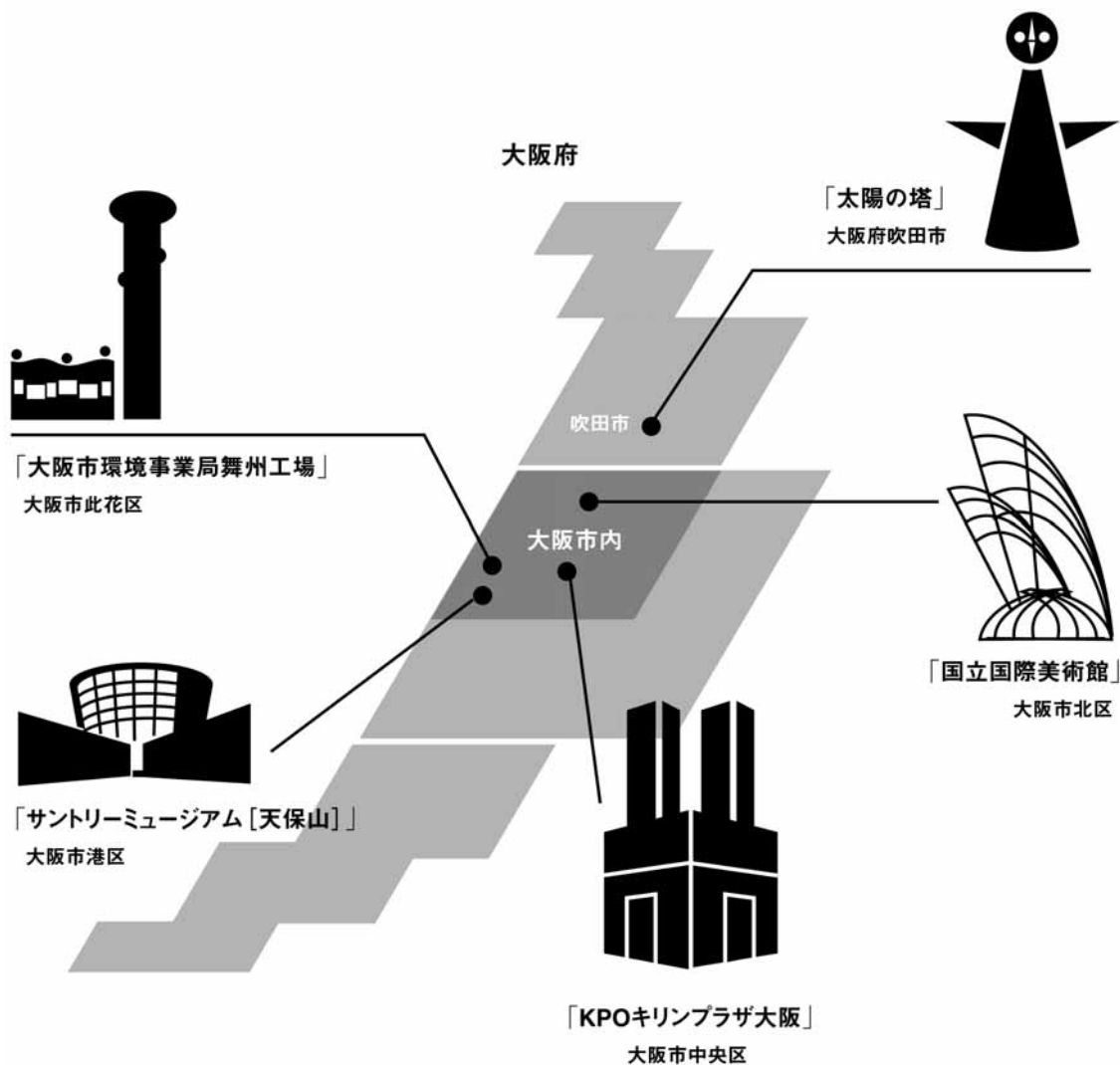
はじめに

現代美術と現代アートについて

一般的に現代美術とは、第2次世界大戦以後の美術とされている。第2次世界大戦を境として美術の性格が一変してしまったわけではないが、大きな変化を示しているところもある。それは、絵画・彫刻という従来のカテゴリーに分類することが困難な芸術表現が生まれてきたからだ。アクションやハプニング、そしてパフォーマンスといった身体表現から、インスタレーションといった仮設的装置によって一時的に展示空間を変容させるもの、映像やコンピューターを使ったメディア・アートという表現などがある。こうなると美術とも言えず、近年はアートと表現する方が、理解しやすく適切な表現なのかもしれない。

そこで、先鋭的な創造行為で時代精神を表現してきた現代美術を、現代アートと呼ぶことにしたい。ここでは、絵画・彫刻・インスタレーションなどを中心としたハイアートや建築・工芸・デザインなどの機能を持つローアート、そしてサブカルチャーを含むアートとして漫画・アニメーション・フィギアなども網羅する。

大阪アートMAP



第1章 大阪における現代アートの特徴

1 アマチュアリズムが貫く大阪の芸術文化

大阪の芸術、美術、文化の歴史をふりかえると、政権の中枢にあった東京や京都など、江戸幕府、明治政府や天皇制が大きく影響している官製（お上）の文化とは異なる、町人、庶民、民衆の文化、在野精神、反中央、反お上の反骨精神、民間活力、民間主導＝アマチュアリズムが息づく街が大阪だともいえる。18世紀末の江戸時代、現実主義的な気風、実証主義的、即物主義的精神にあふれた学者山片蟠桃、また文化サロンでもあった「兼葭堂」も、町人、商人のアマチュアリズムから生まれている。

大阪のアートを歴史的視野でみると、アマチュアリズムにつきる。アマチュアリズムが息づくアートの街が大阪だともいえる。18世紀末の江戸時代、文化サロンでもあった「兼葭堂」も大阪らしいアマチュアリズムから生まれたひとつの近世における代表例であろう。借家貸しなどで生計を立てる町民であったが、詩文、書画、博学儒学から菟書や出版にいたるまで、文化のあらゆる部門で活躍した木村兼葭堂(1736-1802)は、本居宣長、上田秋成、円山応挙、与謝蕪村、池大雅、司馬江漢ら一流の文化人と交流し情報を収集し発信した。当時「兼葭堂」文化サロンは情報基地であり情報が集積する場所として存在し、また芸術文化のパトロンとしても影響力を持った。

2 近代洋画と日本画の教育と発展

20世紀に入っては、1924年に画家の小出檜重(1887-1931)、国枝金三(1886-1943)、鍋井克之(1888-1969)らが「信濃橋洋画研究所」を靱本町に開設し、理論と実践を組み合わせさせた教育で多くの画家を生み出した。後に中之島に移転し、「中之島洋画研究所」として1944年まで活動し、大阪の近代洋画の発展に寄与した。

天才画家、佐伯祐三(1898-1928)と山本発次郎は希有な出会いをした。大阪の実業家山本発次郎は、美術収集家として著名であったが、佐伯の没後にその作品と出会い衝撃を受け、滞仏期の作品を中心に収集をした。

佐伯は、短期間の活動の大部分をパリで過ごし、客死した。野獣派的な表現でパリの街角、店先を描き、ポスターや看板などの文字を画面構成し都市風景に独自性をみせた。その佐伯作品を没後まもなくから収集しはじめた山本発次郎のコレクションが、現在計画されている大阪市立近代美術館(仮称)の佐伯祐三コレクションの中心となっており、その質と量で圧巻、約50点を保有している。また、京都と比べると数こそ少ないものの、生田花朝(1889-1978)、北野恒富(1880-1947)、島成園(1893-1970)など日本画家の活躍も忘れてはならない。



佐伯祐三「郵便配達人」
写真提供 / 大阪市立近代美術館建設準備室

3 写真クラブの誕生

大阪の写真のスタート地点である「浪華写真倶楽部」。その多くはアマチュア写真家であった。「浪華写真倶楽部」は、桑田正三郎、石井吉之助らにより1904年に創立し、100周年を迎え、日本最古の写真団体として有名である。その「浪華写真倶楽部」から分かれて、1930年に心齋橋の丹平ハウスで結成されたのが、アマチュア写真の「丹平写真倶楽部」。安井仲治、上田備山らを指導者とした。

「丹平写真倶楽部」には岩宮武二(1920-1989)が入会し、1951年に瑛九らとデモクラート美術協会を創設した。1956年写真集「佐渡」を発刊し注目を集める。他方、田中幸太郎(1901-1995)は、1932年に創作者写真グループ・稚草者を創立し、関西写真界の中心的な存在として活躍した。

戦後の森山大道(1938-)は、商業デザイナーとして出発したが、後に写真家に転向した。彼は現代日本の写真表現の革新者として、1968年に「挑発する」という意味の「PROVOKE」誌を批評家と写真家とで発刊し、「アレ、ブレ、ボケ」という言葉で形容されるように今までの写真の既成概念を根底から切り崩した写真家である。

4 博覧会都市・大阪に現存する遺産

「博覧会都市」としての大阪。その遺産として「通天閣」と「太陽の塔」があげられる。産業革命の成果の上に立つ新しい文化を諸国が競って、19世紀末からの100年間、時代精神を鮮やかに表現してきた万国博覧会(日本の近代においては富国殖産政策の表現たる内国勸業博覧会)の歴史的遺産としてこのふたつが大阪にある。

「通天閣」は1903年の内国勸業博覧会の跡地に作られた遊園地に1912年に建設され、パリ万博におけるエッフェル塔のようなランドマークタワーとしてイメージされた通天閣は、戦後建て替えられたとはいえ、大阪のシンボルとして今も生き続けている。



岡本太郎「太陽の塔」写真提供 / 加藤義夫芸術計画室

また、戦後の高度経済成長期1970年の「EXPO'70日本万国博覧会(大阪万博)」に建設された前衛芸術家、岡本太郎(1911-1996)の「太陽の塔」は、他界後の岡本太郎の再評価とともに再び人気を博しており、文化庁が2006年10月に発表した、50年代から現在までの、印象に残ったアートやアニメ、漫画等の作品をアンケートで選ぶ「日本のメディア芸術100選」アート部門では第1位であった。

「芸術は爆発だ」という言葉を残した岡本太郎の影響力は、現代のアーティストにも及ぶ。また大阪万博は、現代アーティストのヤノベケンジ(1965-)の原風景となり作品にも反映し、その影響力はアーティストの間で絶大である。高さ145m幅128mの「太陽の塔」は、日本最大級のパブリック・アートともいえる。その意味で現代アートの世界遺産ともいえるだろう。

1990年バブル経済はなやかなりし頃「EXPO'90国際花と緑の博覧会」が鶴見緑地で開催された。そのシンボルタワーが現在も鶴見緑地に残る。この時の花博写真美術館の写真コレクションは、現在大阪府が保存し活用している。

戦前の内国勸業博覧会や戦後の2度にわたる国際博覧会などを実施した都市は、全国でも珍しく大阪以外にない。その意味でも大阪は「博覧会都市」といえるのではないだろうか。

第2章 大阪に育まれた現代アート

1 吉原治良と具体美術協会

現代アートにとっては、自由自在な実験的表現活動の基本となってきた良い意味での反中央(反権力、反東京、非京都の) 在野(アマチュアリズム)の現実主義的、即物主義的精神が横たわる都市が大阪であろう。

第二次世界大戦後の日本現代美術の代表格でもあり、世界に誇る前衛芸術集団として評価の高い「具体美術協会(1954-1972)」。そのリーダーだった吉原治良(1905-1972)の影響力と功績は、大阪の地方的な現代美術という範疇を軽々と超え、世界の現代美術史の1ページを飾るものである。そして世界に名だたる前衛伝説を生んだ。その精神は「人のまねをするな、いままでにないものをつくれ」という極端なオリジナリティへの信仰が貫いていた。

その「具体美術協会」の発表の場として中之島に生まれたのが「グタイピナコテカ」だ。フランス美術評論家ミシェル・タピエが唱えるアンフォルメル(非定形絵画)旋風と同調し、また絵画的造形世界に縛られない表現を試みるという主旨で「行為の芸術」を生み出した。吉原治良、元永定正(1922-)、白髪一雄(1924-)、嶋本昭三(1928-)、田中敦子(1932-2005)、村上三郎(1925-1996)、金山明(1924-2006)などのアヴァンギャルドなアーティストが多数、輩出した「具体美術協会」そのものの活動が前衛的かつ実験的な方法論で語られたアマチュアリズムの最たるものかもしれない。これも今でいうアーティスト・イニシアチブのような活動といえるだろう。



今はなき「グタイピナコテカ」写真提供 / 芦屋市立美術館

2 もうひとつの前衛伝説

具体美術協会より3年早く、大阪を発祥の地とした前衛グループが誕生していた。瑛丸を中心に反画壇・反公募展を標榜する「デモクラート美術家協会(1951-1957)」である。東京からはアイオー、池田満寿夫、河原温などが参加し、大阪からは泉茂(1922-1995)、吉原英雄(1931-)、山中嘉一(1928-)、早川良雄(1917-)が参加した。「デモクラート美術家協会」は、自由と独立の精神で制作することを理念とし、参加者は美術家に限らずデザイナー、写真家など多彩なメンバーで構成され、大阪と東京でグループ展を開き機関誌も発行した。

また一方、前田藤四郎(1904-1990)は、昭和の版画史に大きな名を残し、大阪という都市のモダニズムを体現する版画家として活躍した。須田剋太(1906-1990)は、30年代から作家活動をはじめ、50年代にサンパウロ・ビエンナーレに参加、80年代に司馬遼太郎原作の小説「街道をゆく」の挿絵を週刊朝日に連載し人気を博した。抽象絵画の津高和一(1911-1995)は、40年代から作家活動をはじめサンパウロ・ビエンナーレに参加し、60年代後半から80年代半ばまで大阪芸術大学で後進の指導に努めた。



森村泰昌「ゴッホ」写真提供/MEM INC.

3 関西ニューウェーブ 森村泰昌の出現

80年代になると禁欲的でミニマルな表現の東京を中心としたアートと一線を画す、ダイナミックで有機的な造形とユーモラスで派手な色彩を用いた大阪的なアートが出現した。80年代ヴェネチア・ビエンナーレのアペルト部門に選出された森村泰昌(1952-)・石原友明(1959-)・松井智恵(1960-)・コンプレッソ・プラスティコ(松陰浩之+平野治朗)・椿昇(1953-)・中原浩大(1961-)などだ。

特に、森村泰昌は大阪が生んだ国際的な現代美術家。名画を独自の解釈で再現したり有名女優に扮したりした。その他、中西學(1959-)は、兵庫県立近代美術館の「アート・ナウ」や滋賀県立近代美術館の「シガアニュアル」などで活躍した。

4 大阪を拠点に活動した現代音楽の巨匠小杉武久とサウンドアートの藤本由紀夫

小杉武久(1936-)は60年代、日本初の集団即興演奏のためのグループ「グループ音楽」を結成。60年代はじめ「フルクサス」に参加。「流転」を意味する「フルクサス」は、視覚芸術と音楽を中心に、映像・文学・演劇などを混合させた前衛芸術運動だった。

その後、彼は1969年「タージ・マハル旅行団」を結成し、1977年渡米「マース・カニングハム 舞踏団」の作曲家・演奏家として音楽監督をつとめ活躍。出身は関東だが、80年代後半より関西に在住し、大阪市内の事務所を拠点に世界各地の芸術祭、コンサート、展覧会で活動している現代音楽家、造形作家である。

一方、藤本由紀夫(1950-)は、70年代よりエレクトロニクスを利用したパフォーマンス、インスタレーションを行い、80年代半ばよりサウンド・オブジェを制作。現代音楽のジャンルから美術に越境してサウンドアートを拡張していった。

藤本由紀夫は、西宮市大谷記念美術館とのコラボレーション「美術館の遠足(1997-2006/全10回開催)」で、毎年1回1日だけ開く展覧会を企画実現した。2001年ヴェニス・ビエンナーレ日本代表ともなった。

5 現代彫刻の旗手たち ~持続するところざし~

現代彫刻でヴェニス・ビエンナーレ日本代表に選ばれた、大阪ゆかりのアーティストとしては、1980年代表の小清水漸(1944-)と1988年代表の植松奎二(1947-)と1990年代表の村岡三郎(1928-)がいる。

小清水漸は、1971年「パリ青年ビエンナーレ」、1980年「ヴェネチア・ビエンナーレ」、1983年「サンパウロ・ビエンナーレ」、「光州ビエンナーレ」などの重要な国際展に参加。1970年前後には、日本現代美術史に残る「もの派」のひとりとして活躍した。国立国際美術館や岐阜県美術館などで個展を開催。

植松奎二は、ドイツのデュッセルドルフと大阪に在住し、ヨーロッパと日本で活躍している。重力を視覚化する彫刻やインスタレーションを制作。スウェーデンやドイツでの個展を開催。近

年は北九州市立美術館や国際芸術センター青森、西宮市大谷記念美術館などで個展を開催。村岡は鉄の彫刻家として空気や水などを視覚化し、東京と京都の国立近代美術館で個展を開催。また「光州ビエンナーレ」にも参加している。

その他、森口宏一(1930-)は、鉄・ステンレス・ガラスといった素材を使いシャープで理知的な作品を確立し国立国際美術館や伊丹市立美術館で個展を開催。福岡道雄(1936-)は、空気を作品として対象化し、日常の光景を再現するような風景彫刻を制作し、伊丹市立美術館で個展を開催。

新宮晋(1937-)は、東京芸大を出てローマ国立美術学校に留学後、立体に興味を持ちはじめ、大阪造船所の援助を得て風や水など自然のエネルギーで動く彫刻を中心に、国際的に活躍している。毎日芸術賞特別賞受賞(2002)。

野村仁(1945-)は、1970年の東京ビエンナーレ「人間と物質」展や1975年「パリ青年ビエンナーレ」、1982年「インド・トリエンナーレ」、1989年「シドニー・ビエンナーレ」などの国際展に参加。80年代に太陽や星の運行を写真に撮り続け、隕石やYS11旅客機の尾翼、隕石とDNA模型パーツを構成、90年代にはソーラーカーの自作でアメリカ大陸を横断するなど、宇宙や生命の起源といった神秘を探究する作品でユニークな活動をしてきた。国立国際美術館、水戸芸術館、豊田市美術館で個展を開催した。

6 商業美術をリード ~グラフィック・デザインの隆盛~

大阪の商工業や新聞社の発展とともに、商業印刷も隆盛していった。その傍らに咲いたモダン・グラフィックデザインの世界では、画家とデザイナーを両立させた今竹七郎(1905-2000)、その今竹スタジオでアシスタント・デザイナーをしていた早川良雄(1917-)がいた。ふたりは大丸、高島屋、三越、近鉄といった百貨店の宣伝部や意匠部で活躍した。特にバウハウスの教育の洗礼を受けた早川良雄は、60年代から高度経済成長における日本のモダン・グラフィックデザインの推進力となったひとりだ。

その他、山名^{やまな}文夫^{あやお}(1897-1980)は、資生堂の企業イメージや広告デザインを確立させ、現在でいうところの、コーポレート・アイデンティティの先駆といえるだろう。山城隆一(1920-1997)は百貨店勤務を経て日本デザインセンターに参加、後に猫のイラストレーションで人気を博した。

田中一光(1930-2002)、永井一正(1929-)、横尾忠則(1936-)といった戦後の日本グラフィックデザイン界を代表する世界的なグラフィックデザイナーも大阪が生み出した。

60年代田中は「産経観世能」や「人形浄瑠璃・文楽」のポスターを制作し和のモダニズムデザインを確立、永井は有機的でかつ幾何学的抽象イメージのモダニズムデザインの世界を確立した。

他方、横尾はモダニズムデザインの合理性に反発し、日本の土着的な要素をデザインに採用し、「劇団状況劇場」のポスターなどでニューヨーク近代美術館で個展も開催した。その後横尾は1960年に上京。同時期に田中、永井も日本デザインセンター設立のため上京する。

この3人のデザイナーは、いずれも版画というメディアに興味を持ちシルクスクリーン技法などによる版画やポスターを数多く制作している。70年代には、これらの3人と東京の福田繁雄を加えた



田中一光「産経観世能ポスター」
写真提供 / 田中一光アーカイブ

4人で「日本グラフィックデザイナーの四天王」と呼ばれた。

大阪府や大阪市そしてサントリーミュージアム[天保山]などでは、写真やデザインの豊富なコレクションを保有しているほか、大日本印刷株式会社のDDDギャラリー（大阪市北区）では、世界のグラフィックデザイナー達の展覧会を定期的に行われ注目されている。

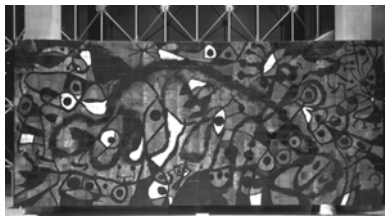
第3章 現代アートの実験地・発信地としての大阪



「国立国際美術館」写真提供/国立国際美術館

1 日本初の現代美術館 「国立国際美術館」

1970年の大阪万博の美術館施設を受け継ぎ、1977年に吹田市で、国内外の現代美術を中心とした作品を収集・保存・展示・調査・研究を目的として開館した国立国際美術館。大阪万博の遺産として巨匠ジョアン・ミロの陶壁画「無垢の笑い」(5m×12m)などをコレクション。その他、20世紀最大の画家パブロ・ピカソの初期の名作「道化役者と子供」や戦後日本現代美術のスーパースターといわれた高松次郎の代表作「影」の壁画(3m×12,45m)など約4000点の近現代美術コレクションを保有している。2004年中之島に新築移転。シーザ・ペリ設計の地下型美術館として世界でも希有な美術館建築になっている。



ジョアン・ミロ「無垢の笑い」写真提供/国立国際美術館

1974年に大阪府民ギャラリーが開設されたが、1980年に名称を大阪府立現代美術センターと改名。企画事業として「吉原治良賞展」や「現代美術コンクール」そして国際的な芸術家交流を目的とした「ART-EX(アーテックス)」などを継続している。2004年からはプロデューサー性を導入した「大阪・アート・カレイドスコープ」展を開催し、「交通するアート」をキーワードに

展開している。また、大阪トリエンナーレの入賞作品や現代版画など約7500点をコレクション。関西圏の現代アートの情報センターとしての機能を持ち合わせた施設でもある。

他方、大阪市立近代美術館建設準備室では、大阪ゆかりの佐伯祐三の絵画を約50点、吉原治良の作品や資料約900点を保有し、その他、世界の近現代美術の名品を含めると約3000点の優れたコレクションがある。

2 作品としての建築

当初、デザインミュージアムとして構想された美術館、サントリーミュージアム[天保山]は、大阪が生んだ世界的な建築家安藤忠雄(1941-)が設計したものである。ガラス張で逆円錐の建物から海に突き出したギャラリーがユニーク。ファイン・アートからデザイン、写真、サブカルチャーまで幅広い企画展を開催している。サントリーミュージアム[天保山]の他、安藤忠雄建築の代表作は大阪にも多く「光の教会」、「大阪府近つ飛鳥博物館」、「大阪府立狭山池博物館」、「司馬遼太郎記念館」などがある。



「サントリーミュージアム【天保山】」写真提供/サントリーミュージアム



写真提供 / ノマル・プロジェクトスペース

安藤忠雄らのモダニズム建築とまた違った別の立場から考え出されたオーストリアの現代アーティスト、フンデルト・ヴァッサー(1928-2000)の自然環境保護の理念にもとづく建築は、大阪市内に3カ所(子ども用施設「キッズ・プラザ大阪」、ゴミ焼却施設「大阪市舞洲工場」、汚泥処理施設「スラッジセンター」)あり、世界でもめずらしいといえる。樹木などの自然を取り入れた外観デザインは、実にユニークな建築物だ。派手で目立つデザインは、大阪的ともいえ大阪の街にマッチしているともいえる。

1987年大阪ミナミのランドマークとして開館したKPOキリンプラザ大阪の建築設計はポストモダンの建築で有名な高松伸(1948-)。彼はこの設計で建築学会賞を受賞した。キリンビール株



「KPO キリンプラザ大阪」写真提供 / KPO キリンプラザ大阪

式会社は企業メセナで「メセナ大賞'98」の普及賞を受賞。芸術家支援プログラム「キリンプラザ・コンテンポラリーアート・アワード」から前述した現代アートのヤノベケンジや束芋などの若手アーティストが輩出した。ビール工場とレストランを併設したKPOキリンプラザ大阪は、大阪の現代アート発信基地ともいえる。

その他にも、村野藤吾(1891-1984)が設計した、桃山風のデザインが印象的な「新歌舞伎座」をはじめ、関西大学円神館、南大阪教会、フジカワ画廊、渡辺節が設計し村野藤吾がヘッドドラフトマンをした「綿業会館」、安井武雄設計の「大阪ガスビル」、原広司(1936-)設計の「梅田スカイタワービル」などがある。

3 道頓堀界隈の文化

KPOキリンプラザ大阪のある道頓堀は、古くは江戸時代から中座や角座など五座の芝居小屋が立ち並び見せ物の街として発展してきた。

松本喜三郎の生人形、一田庄七郎の籠細工をはじめとする造り物の伝統は、芝居の大道具、小道具の伝統は、現在の道頓堀筋の看板やネオンサインに受け継がれているように思える。グリコのネオン看板をはじめ、かにやふぐ、食い倒れ人形などは大阪のシンボルとなっている。

現代大阪のアーティストもこの街から少なからず触発され、創作のインスピレーションを得てきたともいえる。

大阪を代表する「文楽」もこの地域から生まれた。伝統芸能と現代アートの横断と交通という意味では、国立文楽劇場を中心とする「文楽」。太夫や三味線などの若い世代は、ロック・ミュージックや演劇など、伝統と現代アートとの結びつきを試行している。

4 地域社会に密着し、根付くアート系NPOの活動

地域に密着したアート系NPOの活動も注目したい。NPO法人大阪アーツアポリアは、現代アートと現代音楽のイベントを多数企画。動物園前のフェスティバルゲートに位置するNPO法人こえとことばとこころの部屋(cocoroom)、NPO法人DANCE BOX(Art Theater db)、NPO法人Beyond Innocence(BRIDGE)、NPO法人記録と表現とメディアのための組織(remo)は、地域社会とのコミュニケーションをはかりながら活動を展開している。また下寺町の應典院もNPO的な趣旨のもとに地域社会との交流を高めるといふ。本来の宗教施設のあり方にもどり、コミュニケーション・センターとして機能する。NPO法人CAS(Contemporary Art Spirits)は、主に実験的作品を紹介する展覧会やシンポジウムを展開している、アーティストが主体のNPOだ。このように、大阪にはアート系NPOが他の都市に比べると多く、民間のアート系NPOなどの地域に密着した活動に期待したい。

5 美術教育と研究機関

松原三五郎の天彩画塾(1904)、赤松麟作の洋画塾(1907)、信濃橋洋画研究所(1924)、矢野橋村の私立大阪美術学校(1924:天王寺、1929:枚方に拡張移転)、中之島洋画研究所(1931)など、近代の大阪は民間の美術学校が中心となって美術教育を行っていた。

現在、大阪府域には芸術系大学としては大阪芸術大学、梅田に宝塚造形芸術大学のサテライトがある。総合大学では大阪大学、大阪教育大学、関西大学、大阪産業大学、近畿大学などそれぞれ美術教育、美術史、建築、デザイン、文芸などの関連講座を有している。

なかでも、1972年に出来た大阪大学文学部美学科は、日本の国立大学では「美学」「美術史1」「美術史2」「芸術学」「音楽学」「演劇学」の6講座を完備する、初めての芸術学系美学科(現在は芸術学科)であった。ここから、芸術系大学である大阪芸術大学出身の中西學や大阪市立工芸高校出身の今井祝雄(1946-)が、大阪のアートシーンに刺激を与えた人材として輩出した。

また、近畿大学の文芸学部も新たなアートを探る試みとして、OBP アーツプロジェクトに参加し大規模なダンス・パフォーマンスを展開している。その他、IMI・彩都メディア図書館やOZC(大阪造形センター)などもユニークな活動を展開している。

第4章 サブカルチャーとしての大阪発信のアート

1 「マンガ」

手塚治虫(1928-1989)は、戦後もっとも様々なジャンルに影響力のあった天才漫画家。日本のポップアートの原点とも言えるかもしれない。今日の村上隆や奈良美智はもちろんの事、多くの現代美術家が子供の頃、多大な影響を受けた。大阪大学付属医学専門部の学生であった1947年(19歳)に、長編マンガ「新宝島」を大阪の出版社より発売、版を重ね40万部の大ヒットとなった。1961年に手塚治虫プロダクション動画部を設立。後に「虫プロダクション」に改名。1963年国産初のテレビアニメシリーズ「鉄腕アトム」が放映される。そして、現在でも手塚のアニメーションは全世界のTVで放映中。代表作に「鉄腕アトム」「リボンの騎士」「ビッグX」「ジャングル大帝」「ワンダースリー」「バンパイア」「火の鳥」「どろろ」「ブラックジャック」「三つ目がとおる」「ブツダ」などがある。世界的天才漫画家としてあらゆるジャンルに絶大な影響力を示した手塚治虫は、まさに大阪が世界に誇る巨人クリエイターである。

その他、大阪ゆかりの漫画家として、「ゴルゴ13」で一世を風靡した劇画のさいとうたかお(1936-)、「子連れ狼」の劇画原作者であり、現在大阪芸術大学文芸学科長を務める小池一夫(1936-)、「巨人の星」の川崎のぼる(1941-)、「じゃりん子チエ」のはるき悦巳(1947-)、少女マンガ「ベルサイユのバラ」の池田理代子(1947-)や「天上の虹」の里中満智子(1948-)らもいる。どおくまん「嗚呼 花の応援団」、青木雄二(1945-2003)「なにわ金融道」などもあげておこう。

2 造形集団「海洋堂」

海洋堂は、創業者の宮脇修(1928-)が、1964年に大阪府守口市に設立したプラモデル店が始まりである。現在は、ホビーショップ、ガレージキット販売、ワンダーフェスティバルなどを主宰し、模型業界のリーディングカンパニーとなっている。

日本が世界に発信する新しい文化「フィギュア」の製造メーカーとして圧倒的な人気と評価を誇る造形集団「海洋堂」は、1980年以降、長男の修一(1957-)によるフィギュア製造へのこだわりによって、世界から注目されるフィギュア・メーカーとして成長した。現代アートの村上隆と「海洋堂フィギュア」のコラボレーションは大きな話題となった。

3 空間デザイン集団 graf(デコラティブモードナンバーズリー)

1993年にクリエイター仲間6人が集まり、1998年から大阪中之島で活動し、大阪を拠点として東京やロンドンにも事務所を持つgraf。「心地よい暮らしのための空間づくり」というコンセプトのもとに各メンバーの個性を活かした独自の活動を展開している。

家具の制作販売やカフェ、レストラン、ギャラリーを展開。代表は服部滋樹(1970-)。grafは現代アートの奈良美智とのコラボレーションもおこない、2003年以後、展示空間そのものを作る試みも続けている。2005年には横浜トリエンナーレに参加した。

4 劇団「維新派」

松本雄吉(1946-)が率いる日本を代表する劇団で、世界の国際演劇祭などにも参加し高い評価を得ている。

1970年劇団「日本維新派」を結成し、1987年に「維新派」と改名。空き地に巨大野外劇場を建ち上げる「維新派」は、美術でいうインスタレーションともいえ、それ自身が時空間と視覚芸術のハイブリッド作品ともいえる。

インスタレーションとパフォーマンスといった芸術環境装置の中での身体表現は、もはや演劇というカテゴリーだけでは語れない。

第5章 ブランド資源のアピール戦略

1 アートマップの制作

現在、活発に活動している現代アートの美術館・画廊・NPO・アートセンターなどを網羅したアートマップで大阪の現代アートをアピールする。

2 現代アートの連続講座

戦後の関西の美術動向を探り検証するようなシンポジウムや講座を定期的で開催する。

また、戦後美術を総括し関西(大阪)の現代美術史を作るとともに、世界の現代美術との影響関係も検証する。

3 大阪市立近代美術館建設準備室や大阪府のコレクションの活用

倉庫に眠っている美術作品、佐伯祐三や須田剋太などのコレクションの活用が必要。

現在、大阪市立近代美術館建設準備室は心齋橋展示室を持ち、コレクションの一般公開をおこなっている。また、大阪府でも府庁やモノレール各駅で現代彫刻の展示などを行っている。

4 既存のアートフェアの活用

現在、日本において現代アートだけのアートフェアが開催されている地域は大阪だけである。

行政主導でおこなわれているアートフェアは、大阪府立現代美術センターの「ギャラリズム」がある。関西の画廊が集まって展覧会やイベント、シンポジウムを開催。

他方、民間でも、大阪港にある海岸通ギャラリー・CASOを会場に国際的なアートフェアが開かれている。東京・名古屋・京都・大阪・韓国などから画廊が集結。アートイベント、シンポジウムなども開催。将来的には東アジアの代表的なアートフェアに発展する可能性もあり、既存のアートフェアを活用して大阪ブランドを全国またはアジア地域に発信していくことができる。ベイエリア地域をアートフェアで活性化していくことも可能だろう。築港赤レンガ倉庫やサントリーミュージアム[天保山]、海遊館などの空きスペースやギャラリーにアートフェアの関連事業を展開することもできる。点が線になり面となることで、ベイエリア地域の観光資源を現代アートでバックアップできる。

ゴールドトライアングルと呼ばれる大阪港(日本)・上海港(中国)・釜山港(韓国)は大阪市の姉妹港である。すでに上海と釜山は大規模な国際展ビエンナーレを開催しているが、大阪もビエンナーレ(隔年開催)やトリエンナーレ(3年に1度開催)といった国際展の企画開催が望まれる。大阪は国際展とアートフェアを組み合わせ、現代アートとアートマーケットの場として、世界の美術関係者やマスコミを魅了することも可能である。

5 中之島の文化ゾーンをアピール

大阪の中心である「中之島」の芸術文化イメージを強く打ち出す。国立国際美術館、大阪市東洋陶磁美術館、大阪府立中之島図書館、中央公会堂などの大規模な文化施設が集積していることをアピールすることが重要であろう。

アートパネル構成メンバー（敬称略）

パネル座長

建畠 哲（国立国際美術館 館長）

パネル委員

熊田 司（大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 研究主幹）

中塚 宏行（大阪府立現代美術センター 主任研究員）

森本 俊司（朝日新聞社 編集委員）

事務局

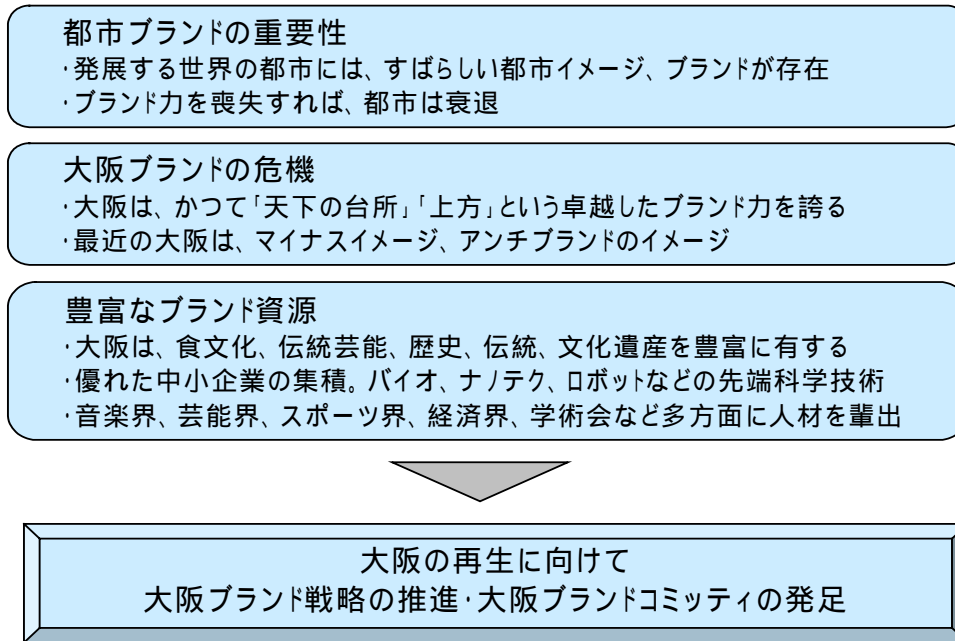
加藤義夫芸術計画室

（構成）

加藤義夫（加藤義夫芸術計画室 代表）

【参考】 大阪ブランド戦略について

■ 大阪ブランドコミッティの設立趣旨 ~ 大阪に吹く新しい風 Brand-New Osaka ~



■ 大阪ブランド戦略の概要

「大阪ブランド戦略」の意味

大阪という言葉から連想される良いイメージ(ブランド=都市魅力)を回復、向上、確立し、情報発信する活動。
(大阪が自信と誇りを取り戻し、新たな発展に向かう気概を内外にアピールする運動)

目的

大阪ブランド戦略の目的は、「大阪の再生」。
新たな大阪のイメージ < Brand-New Osaka > を創出、定着させ、人、もの、資金、情報、企業を呼び込むことで、「大阪の再生」を目指す。

活動内容

大阪を知る

大阪の魅力をアピールできる歴史・伝統・文化遺産、優れた技術・企業・人材などを「ブランド資源」(大阪の強み)として発掘又は再評価する活動。

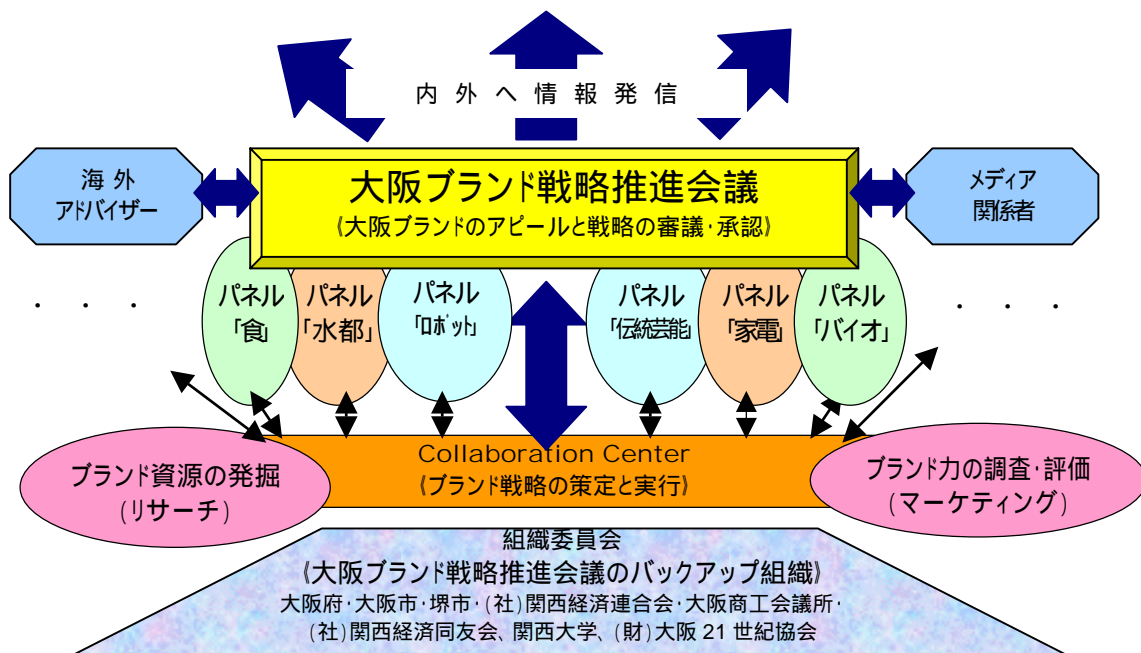
大阪を磨く

「ブランド資源」について、価値の明確化、新たな魅力の付加等により、その魅力を増大させる活動。

大阪を語る

「大阪ブランド」を統一的消息として、国内外に向けて戦略的に発信する活動。

大阪ブランド戦略の推進体制



大阪ブランドコミッティにご協力いただいている方々

大阪ブランドコミッティ

【大阪ブランド戦略推進会議】

議長	安藤忠雄氏(建築家・東京大学名誉教授) コシヒロコ氏(デザイナー)
顧問	坂田藤十郎氏(歌舞伎俳優) 梅棹忠夫氏(国立民族学博物館顧問) 大久保昌一氏(大阪大学名誉教授) 岸本忠三氏(大阪府特別顧問) 宮原秀夫氏(大阪大学総長)
委員	専門家、有識者、文化人など約100名

【コラボレーションセンター】

チーフ	堀井良殷氏((財)大阪21世紀協会理事長)
-----	-----------------------

【組織委員会】

委員長	熊谷信昭氏((財)大阪21世紀協会会長)
委員	太田房江氏(大阪府知事) 關 淳一氏(大阪市長) 木原敬介氏(堺市長) 河田悌一氏(関西大学学長) 秋山喜久氏((社)関西経済連合会会長) 野村明雄氏(大阪商工会議所会頭) 寺田千代乃氏((社)関西経済同友会特別幹事)